Card Magic Magazine

No. 5 **September 2, 2012** **by Hideo Kato**

© Hideo Kato 2012 年 9 月 2 日

Thirty Card Mystries

= 第 4 回 =

12. エスケープ

= The Escape =

＊現　象＊

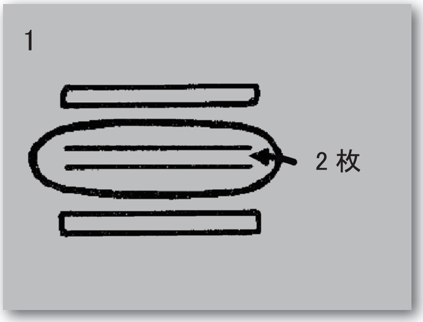
人から借りたデックを使います。半分ぐらい相手に渡し、その中から 1 枚のカードを選ばせます。客がカードを選んでいるとき、マジシャンは残りの半分に横方向に輪ゴムをかけます。選ばれたカードをこのパケットの中に入れ、さらに縦方向に輪ゴムをかけます。このパケットを客の 1 人に持たせます。マジシャンは他方のパケットにも横と縦に輪ゴムをかけます。魔法をかけるとすごいことが起こります。選ばれたカードが最初のパケットから消えて、他方のパケットの中から出てきます。

これは以前、私がマンスリーサービスで提供したものの改良トリックです。原案が好評であったため、この改案を当書に含めるのは、皆さんに喜んでいただけることだと思います。

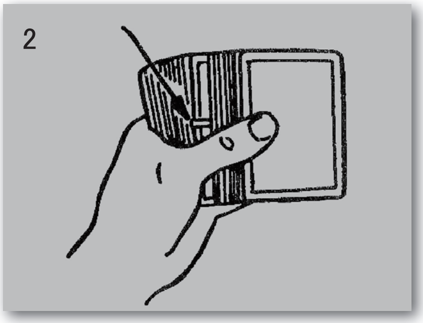
＊方　法＊

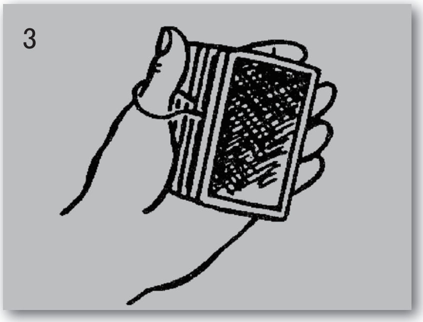
カットされた上半分から客がカードを選んでいるとき、あなたは残りのパケットのトップの 2 枚だけに輪ゴムをかけます。それからカードをシャフルして、輪ゴムのかかった 2 枚を中央近くに運びます。

図 1 は、このときの状態を示しています。(訳注 : ジョーダンは輪ゴムをどこから取ってくると書いていません。輪ゴムをかける部分は、秘密の動作として行うものです)。

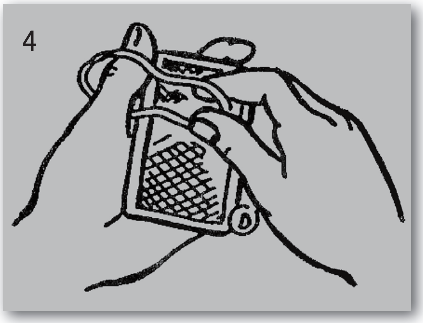


右手で胸ポケットから輪ゴムを取る真似をします。そのとき左手は図 24 のようにデックを開きます。

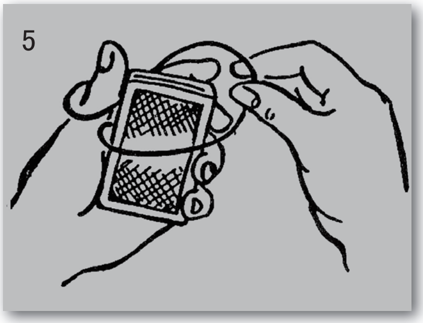




右手は輪ゴムをデックにかける真似をしながら、図 3 で見えている輪ゴムの左部分を引っ張り出し、いったん図 25 のように左親指にかけ、



それから左親指でデックの左サイド上をしっかりと押さえ、輪ゴムを図 4 から図 5 のように、デックにかけます。



結果として、輪ゴムは図 6 のようにかかった状態になりますが、観客からのみかけ上は、たんに輪ゴムをデックに横方向にかけたように見えます。

左手に持ったパケットの上に右手をかけて、最初に輪ゴムがかかっていた 2 枚のカードの間で開きます。そして他方のパケットから選ばれたカードを、その間に入れます。

入れたらよくそろえて右手でパケットをつかみますが、カードが輪ゴムの力で飛び出ないようにしっかり押さえています。そして左手で他方のパケットを取り上げ、左方に運ぶとき、ちょうど右手の下を通り過ぎるときに、右手の力をゆるめます。そうすると輪ゴムによって 3 枚のカードが飛び出しますから、それを左手のパケットの上で受け止めます。そして左手のパケットをテーブルに置きます。

右手のパケットを左手に移し、右手でポケットから輪ゴムを取り出し、いま持っているパケットに縦方向にかけます。このパケットを 1 人の客に持たせます。

テーブルのパケットを取り上げ、それに横と縦方向に輪ゴムをかけます。すでに選ばれたカードは一方から他方に移っていますから、その結果を見せます。

＊訳　注＊

解説中の図は、ファルブズの "Charles Jordan's Best Card Tricks" から引用いたしました。

ジャンピングジャックサンドイッチ

= 加藤英夫、2009 年 11 月 11 日 =

前述の 'The Escape' で、図 3 の状態にするのがあまりにも難しいので、もっとスムーズにできる方法がないかと考えて、うまいやり方を見つけました。しかしその方法は、ジョーダンの現象に使うよりも、もっとビジュアルな使い方ができることも見つけました。'The Escape' のバリエーションと呼ぶべきものではありませんが、'The Escape' を読んで思いついたものですので、ここに収録させていただきます。

＊方　法＊

選ばれたカードをトップにコントロールします。表を自分に向けて広げて、トップの選ばれたカードをグリンプスして、それが字札なら 2 枚の黒いJ、絵札なら 2 枚の赤いAをアップジョグします。黒いJをアップジョグしたとします。

デックを横向きに裏返して、「あなたのカードを見つけるのに、2 枚の黒いJを使います 」と言って、2 枚のJを抜いて表向きにトップに置き、その 2 枚の下に選ばれたカードをアディションし、フェースのJを引いてデックの上に取り、その上に残りの 2 枚を置き、それらをそろえるとき、上から 3 枚の下にブレークを作ります。「Jがあなたのカードを見つけにいきます」と言って、ブレークを利用してダブルアンダーカットします。2 枚のJとそれらにはさまれた選ばれたカードは、ボトムに運ばれます。それら 3 枚の上に左親指のつけ根でサムブレークします。

輪ゴムを全体にかける振りをして、図 1 のような手つきでボトムの 3 枚以外にかけます。

さて、Jはあなたのカードを見つけられるでしょうか」などと適当なことを言いながら、右手でまん中からカードを持ち上げて、それらを下にまわします。左サイドから 3 枚がまだ飛び出さないように押さえておきます。

図 2 のようにデックを左手に持ち、左手をテーブルの上に置きますが、親指の先が輪ゴムがデックの中に入り込んでいる部分ぎりぎりのところを押さえています。

右手で魔法をかけて、左親指をずらします。3 枚が飛び出します。少し前方に傾けてやってください。そうすると、3 枚は前方に飛び出します。

2 枚のJの間にある、選ばれたカードを示して終わります。

＊備　考＊

デックの左サイドを持って放すと、デックが右手に飛んで、3 枚が左手に残ります。

13. ベアフェイスドディテクション

= The Bare-faced Prediction =

＊現　象＊

相手にデックをよくシャフルさせてから、あなたの左手の上に置きます。グリンプスなど余分な動作はしません。相手が適当なところからカットして、上半分をあなたの右手に置きます。相手が下半分のトップカードを取り、見ておぼえてからあなたの右手のパケットの上に置き、その上に左手のパケットを重ねます。相手にデックを何回かカットさせたあと、表を相手の方に向けて広げていき、「これがあなたのカードです」と言って、1 枚のカードを抜き出します。

当たっています。

＊方　法＊

使うデックとは裏模様の違うカードを 1 枚用意しておいて、このトリックをやるまえにパームしておきます。シャフルされたデックを受け取り、パームしているカードをボトムに加えます。

あとは現象説明の通りに進めてください。

14. トウェンティセンチュリーパズル

= The Twenty Century Puzzle =

＊現　象＊

4 人の客が選んだカードをテーブルに置きます。マジシャンはカードが見えていると集中できないと言って、選ばれたカードのうちの 1 枚をデックの中に入れて、精神集中したあと、そのカードを当てます。そのカードを抜き出してテーブルに置きます。あと 3 枚のカードも、同じようにデックの中に入れた状態で当てていきます。

＊方　法＊

シャフルされたデックのボトムカードをグリンプスして、それが中央近くにくるようにカットして、そのカードの下にブレークを保ちます。そのカードをカードaと呼ぶことにします。

4 人の客に1枚ずつ選ばせますが、1 人の客にカードaをフォースします。あと 3 人の客に1枚ずつ選ばせますが、最初の客にフォースが失敗したら、残りの 3 人のうちの 1 人にフォースすればよいのですから、4 回のフォースのチャンスがあります。

4 人の客がそれぞれのカードを見ておぼえている間に、あなたはデックのボトムカードをグリンプスして、それをキーカードとします。4 人客のカードを集めてテーブルに置きますが、カード a がいちばん下にくるようにします。

「選んでいただいたカードを当てますが、カードが見えているとかえって精神集中できませんので、中に埋もれさせてしまいます」と言って、テーブルのパイルのトップカードを取り、デックのトップに置き、1 回カットします。

精神集中する演技を行ってから、「いまこの中に入れたのは、○○の ×× です」とカードaの名前を言います。そして「○○の××を選んだのはどなたですか」とたずねます。

表を自分に向けて広げ、キーカードを見つけ、キーカードの手前のカードをアップジョグし、そこからカードを分け、アップジョグした (カードbとする) を裏向きにテーブルに置きます。右手のカードを左手のカードの向こう側 (トップ側) に置いてそろえます。キーカードがふたたびボトムにきます。

テーブルのパイルからつぎのカードを取り、デックのトップに置き、カットします。2 枚目のカードとしてカードbの名前を言います。

あと 2 枚を同様の方法で当てます。テーブルには 4 枚のカードが重ねられますが、そのうちのトップカードをボトムに密かにパスすれば、4 枚を順番に表向きにして見せることができます。

15. テレパシックコントロール

= Telepathic Control =

この素晴らしいトリックの見せ方は、本当は簡単なトリックでありながら、観客の心理を真実からミスディレクトします。

＊現　象＊

借りたデックをシャフルして何回かカットしたあと、表を客に向けてファンに広げます。デックの中にある 4 枚のカードが入っていると、このトリックができないと言って、マジシャンは 1 枚ずつカードの名前を告げて、そのカードを客に抜き出させて、わきに置かせます。そのようにして 4 枚のカードを減らします。

ここでマジシャンは後向きになり、客にデックを 4 つの組にディールさせます。前に向き直り、客に好きな組のトップカードをのぞいておぼえさせます。マジシャンはそれが奇数であるか偶数であるかをたずね、それをヒントにしてそのカードを当てます。他の組のトップカードもそのようにして当てます。

＊方　法＊

デックを借りてからダブテイルシャフルをするとき、いつもよりカードを多く曲げて、リフルするカードをグリンプスして、ボトムの 5 枚を記憶します。シャフル後に、デックを中央からカットします。

表を客に向けてファンに広げ、1 枚ずつカードの名前を言って、客に抜き出して捨てさせますが、4 枚目を言うときに、シャフル後にボトムにあったカードを言います。そしてそれが抜かれたカードからカットすると、記憶しているあと 4 枚のカードはボトムに配置されます。

あとは簡単です。客がデックを 4 組にディールすると、わかっているカードが 4 組のトップカードとなります。客に好きな組のトップカードをのぞかせて、おぼえてからその組をカットします。そのカードが奇数か偶数であるかをたずねるのは、たんなるミスディレクションです。そのようにして、4 枚のカードを当てます。

今日の発見

= 第 4 回 =

No.010　演技が技法をカバーする

投稿日：2007 年 9 月 30 日

"An Instinct for Cards problem" というスレッドに投稿されていることに刺激を受けて、つぎのようなトリックを考えました。

ここにないカード

= 加藤英夫、2007 年 9 月 30 日 =

ダイヤのAからKまでを順番にデックのトップにセットしておきます。それらを乱さないようなフォールスシャフルを行ったあと、20 枚ぐらいをカットしてトップにまわします。そしてデックをテーブルに置きます。

ここで後向きになり、相手にだいたいまん中あたりからカットして持ち上げて、テーブル上のパケットのトップカードをポケットに隠させます。持ち上げたカードをテーブルのカードの上に重ねてそろえさせます。

前に向き直り、デックを 2 回リフルシャフルします。そしてを表向きにリボンスプレッドします。「手をこのようにかざすと、あなたの隠したカードがわかります」と言って、スプレッドの上で手を左右に動かします。そのときダイヤのカードをトレースしていくと、そこにないダイヤのカードがわかりますので、ポケットの中のカードを告げ、それを出させます。

カーティス・キャムさんの投稿（2007 年 9 月 30 日）

加藤さん面白いトリックですね。トリックが面白いだけではなく、通常ならスプレッドを見渡して目的のカードを見つける、というようなやり方をしてしまいますが、手で探る演技を添えるというのは、目の動きをカバーすると同時に、演技的にも見渡して見つけるより、はるかに優れています。

補　足

キャムさんに私が強調しようとしていなかった点を指摘されて、たいへん有り難いと思いました。たしかにスプレッドを見渡して当てたのでは、マジックというよりもパズルの雰囲気になってしまいます。このように ″Today's Finding″ は、自分の調べたものからの発見だけではなく、優秀な演技者の経験から重要なことを引き出す作業でもあるのです。

なお、指摘されたことは、キーカードを使用したカード当てにも応用できます。

このあとキャムさんと何回かやりとりがあって、その中でスタックを使うことも検討され、私はサイクリックスタックを使う方法を思いつきました。

ここにないカード / スタックバージョン

= 加藤英夫、2007 年 9 月 30 日 =

サイクリックスタックなら表向きにスプレッドしてよく混ざっているこを見せられます。それから裏向きにリボンスプレッドして、後向きになります。相手に好きな 1 枚を抜いてポケットに隠させてから、スプレッドを閉じさせます。そして前に向き直ります。

デックを取り上げ、ストラドルファローシャフルします。そして表を自分に向けて広げると、隠されたカード以外はマッチングペアがくっついているので、隠されたカードがわかるので、適切な演技で隠されたカードを当てます。

No.011　ポケットからのライシングカード

投稿日：2007 年 10 月 7 日

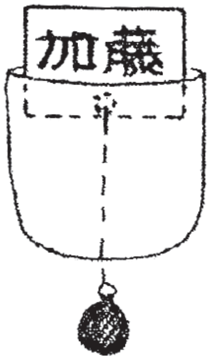
今日は、雑誌”ジニー”1953 年 4 月号に、私が”マジック 100”に書いた、私の作品と同じトリックが書かれていたのを見つけました。当然ながら、そのトリックは私の考案ではなくなったわけです。それは、胸ポケットからカードがせり上がってくるという現象です。私が同書に書いたのは、私の名前が書かれた札がせり上がってくるというものでしが、仕掛はまったく同じものです。

仕掛は、カードの下エンドの中央に糸が結ばれていて、それがポケットの上部内側で上着の内側に通されて、糸の反対の端に重りをつけておくものです。ポケットの中に押し込めておいたカードが、重りを放したときに、その重さによってカードをせり上げるわけです。

セットした状態では、重りが下がらないように、上部につけた小さなポケットの中に納めておき、何かを取り出すときに、密かに重りをポケット体して、脇にはさんで置きます。そして現象を起こすときに、押さえている力をゆるめるのです。

“ジニー”のこの説明を読んで、このトリックを少し改良する方法を思いつきました。カードに糸をつけてあると、出現させたあと、カードを外に取り出すことはできません。取り出せるようにするには、糸を直接カードにつけるのではなく、せり上げる錘掛けにカードをはさむようにしておけば、カードを上に引き抜くことができるはずです。

参考までに、″MAGIC100″から図を引用しておきます。もちろん重りは上着の内側にあります。重りが落ちないようなホルダーに納めておき、何かを内ポケットから取り出すときに、重りを脇の下にはさみ、しかるべきタイミングで重りを落とすのです。



No.012　スネークアウト

<u>投稿日：2007 年 10 月 8 日</u>

‘雑誌”ヒューガードマジックマンスリー”1947 年 12 月号に、’スネークアウト’という面白いトリックが書かれています。玩具でしっぽを持ってくねくね動かすヘビがありますが、あれをテーブルに分散させたカードの上で動かすと､頭の部分に 1 枚のカードがくっついて、それが選ばれたカードだという現象です。

ヘビのアタの下側に磁石をつけておくのです。選ばれたカードの下には小さな鉄片、もしくは砂鉄を置いておきます。他のカードの上で動かしたあと、最後に選ばれたカードの上に頭を位置させれば、くっついて持ち上がるというわけです。

かなり昔、’ディーピーマグネット’というトリックがありましたが、はたしてこのトリックよりもまえにあったのでしょうか。

No.013　間違って訳された名言

投稿日：2007 年 10 月 9 日

″ロベール・ウーダンはマジシャンの成功に不可欠なものを指摘しました。それは、1 に練習、2 に練習、そして 3 に練習であると″。

ジョン・マルホランドが、雑誌″スフィンクス″1949 年 8 月号に、このように書いて以来、これは名言としてよく語られるようになりました。

しかしながら私は今日、雑誌″ヒューガードマジックマンスリー″1949 年 10 月号において、それがウーダンがフランス語で述べたことを、マルホランドが間違って訳したものであることを、ジーン・ヒューガードがつぎのように指摘しているのを見つけました。

ウーダンの言った言葉はつぎの通りです。

″Pour reussir en prestidigitation il faut trois choses; de l'adresse; puis encore de l'adresses; puis ensuit de l'adresses.″

この中に使われている″adresse″は練習という意味ではありません。ウーダンは、手のスキル、目のスキル、口のスキルと言っているのです。ウーダンの言ったことを明確に翻訳しておきましょう。

″マジシャンが成功するには、手のスキルと、目のスキルと、口のスキルが必要なのです″。

このあとヒューガードは、「練習、練習、練習」というのをむやみに信じることや、間違った練習をいくらしてもよくないと、指摘しています。

補　足

ヒューガードは″スキル″と言っていますが、″adresse″というフランス語は、辞書には″手際よさ″という日本語訳がありました。おそらくそのことからスキルと言い換えたのでしょう。いずれにしても、ウーダンの言葉は言い得て妙であります。手のテクニックだけでなく、観客の心理を誘導し、演技として立派なものにするには、目と口のテクニックも訓練されていなければならないのです。さすがウーダン、練習を強調するよりはるかにレベルの高い名言です。

カードマジック創作講座

第３回　出発点をリストアップする

この講座の第２回で、クリンプカードのある枚数目を認知することを取り上げました。今回は、そのようなクリンプカードの使い方以外に、どのようなリビレーションの方法があるか考えます。状況としては、デックを両手の間に広げて、相手に１枚指ささせ、それをアップジョグして見せるとき、左下コーナーをクリンプします。そして中に押し込み、カードをそろえて相手に渡し、シャフルさせます。ここからどう当てるかを、思いつくだけリストアップするのです。

以下に書くことは、アイデアを思いついてから書いたのではありません。書きながらアイデアを出していくのです。言ってみれば、アイデアを出す作業の実況中継のようなものです。

ブレーンストーミング開始

前回は、クリンプカードの枚数目認知というテクニックを使い、シーケンシャルに道をたどって目的に到達するという思考プロセスについて考えました。今回は完成を求める思考ではなく、思考の出発点を見つけるためのブレーンストーミングです。言い換えれば、奥に入っていく垂直な思考ではなく、幅を広げる水平な思考作業を行うということです。

これから書いていく中には、私は知らないが、すでに誰かが考えていたアイデアを書く可能性もあるでしょうし、つまらないアイデアを書くこともあるでしょう。ブレーンストーミングで気をつけなければならないのは、思いついたアイデアがつまらないのではと疑問をもつことは、思考のブレーキになるということです。作品として完成する段階ではありませんから、とにかくたくさんの入口を見つけることが目的であることを忘れてはなりません。

ではブレーンストーミングを始めましょう。最初から奇抜なアイデアを出そうと力んではいけません。まずはいままでに存在するものをリストアップしていくのです。そうするとそれらに刺激されて、次第にアイデアが浮かんできます。まず創作講座第２回で取り上げた、クリンプカードの使い方をリストアップします。

１．クリンプカードがある枚数を認知する
２．相手にクリンプカードでカットさせる。

と書いた瞬間、ひとつのアイデアが浮かびました。″相手にクリンプカードでカットさせる″ということに対して、″マジシャンがクリンプカードでカットする″ということを思いついたのです。

マジシャンがクリンプカードからカットしてダイレクトに現すなどというのは、クリンプが世に現

れたころの初期的な使われ方であったかもしれません。「原始的でつまらないアイデアだ」などと思って無視してはいけません。いまはとにかく数を出すことです。思いついたらメモします。メモしないと思いついたことを、必ずと言ってよいほど忘れてしまいます。

3．マジシャンがクリンプカードでカットする

マジシャンがカットしたところから現れると言っても、ふつうにカットして現すか、チャーリエカットのようなフラリッシュ的なやり方で現すかなど、色々なタイプがありますが、いまはあまり枝分かれは追わないようにします。枝分かれから先のことは、あとでメモを見て、分岐点から思考を行えばよいのです。

ふつうのカットやチャーリエカットのような、意図的なカットとは別に、カードの性質によってカットされて現れるものがあります。たとえば、クリンプカードがまん中あたりにある状態で、デックをテーブル上に回転させて落とすとカードが分かれ、そこから選ばれたカードが現れます。これは〝マジシャンがカットする〟というのとは別にリストしておいた方がよいようです。

4．デックがクリンプカードから分かれる

左下コーナーがクリンプされているカードが、デック中央にある状態で、デックの左サイドを左手で持ち、テーブルの上に左から右に向かって投げてみてください。クリンプカードのところが広く広がるはずです。そこから選ばれたカードを現すだけでもマジックになります。

そのことを何回か実験している最中に、またしても「カードが教えてくれる」ということが起こりました。少し高い位置からデックを落としたとき、クリンプより上のカードが空中回転して表向きになったのです。そのようなことに気づくと、どのようなやり方をしたら、いちばん見事な結果になるか考えたくります。

しかしそのような思考は、奥へ向かう垂直思考ですから、いまはこのアイデアをメモするだけにしておきます。いまは出発点のアイデアを見つけるのが目的ですから。

5．クリンプカードの隣りに別のカードを入れる

つぎに思い出したのは、クリンプカードのあるコーナーにはすき間があるので、そこに別のカードを入れることができるという機能です。たとえばの話、つぎのようなことができます。

デックを左手に持ち、1枚のカードを表向きに右手に持ち、「このカードであなたのカードを見つけます」と言って、デックの方を見ないで、右手のカードをデックの中に入れます。デックを広げて表向きのカードの隣りのカードを見ると、選ばれたカードです。

右手のカードをデックの手前左コーナーに軽く当てて、下から上にすべらせてやると、すき

間に当たったときにわかるので、そこで中に入れてやればよいのです。

このことについてはかなり以前から考えていて、1 枚ではなく、2 枚の表向きのカードをデックの中に入れて、選ばれたカードをサンドイッチ状態にするやり方も見つけています。

このことを思い出したとたん、デックをそろえた状態ではなく、リボンスプレッドした状態でも、クリンプのすき間にカードを入れられるはずだ、と思いつきました。またしてもそこから先のやり方を考えたくなりますが、ここはじっと我慢どころです。

とはいうものの、出発点を見つける垂直思考は、ここで行き詰まってしまいました。いくら考えても、いままでリストアップした 5 つ出発点以外に思いつきもしませんし、思い出すこともできません。すると、はたと思いつきました。WINDOWS の検索機能を使ってみようと。

じつは "Card Magic Library" を編集するとき、検索機能を使って、自分の書いたものや、英語の文献から必要な情報を見つけてきたのですが、第 10 巻でクリンプの章をまとめたにもかかわらず、クリンプについては検索しなかったのです。いま検索をかけてみて、「あっとビックリ」してしまいました。自分が過去に書いたものに、自分が驚かされてしまったのです。今日思いつかなかったクリンプの機能が、あと 3 種類も見つかったのです。つぎのようなものです。

６．クリンプカードのある位置を認知する

これはクリンプカードのある枚数目を認知することとは違います。枚数目ではなく、どこにクリンプカードがあるかを見て、それを利用して現象を起こすのに使います。ノートに書いてあるままを貼りつけておきます。

クリンプカードスタブ (加藤 2001 年 10 月 3 日)

デックから3のカードを１枚抜き、相手にデックを渡してシャフルさせます。デックを受け取ります。クリンプカードがだいたい中央にくるようにカットします。

3のカードを表向きに右手に持ち、左手でカードをリフルして、クリンプカード直後にスタブします。スタブカードがクリンプカードの隣りに入れば、隣りから出現させ、2 枚目に入ったときは3のカードから 3 枚目を抜き出し、3 枚目に入ったときには、3のカードのつぎから数えて 3 枚目のカードを抜き出し、相手のカードを現します。

この説明には、選ばせたカードがクリンプされているということが書かれていませんが、ノートはあくまでも私のための記録ですから、そのへんは書かれていないことが多いのです。もちろんデックの置き方は、スタブ (投げ入れる) するための置き方をします。

7．クリンプカードで鉛筆を止める

つぎに見つけたのは、クリンプカードが曲がっているので、スプレッドの上で鉛筆を転がすと、クリンプカードにぶつかって止まる、というアイデアです。やはりノートから書いたときのまま再録しておきます。

ペンシルファインダー

By 加藤英夫、2004 年 7 月 6 日

まえに似たものを書いているはずですが、今日見つけたハンドリングが最強のものです。クリンプカードを１枚混ぜておきます。このトリックをやるまえに、ボトムに運びます。ヒンズーシャフルしてストップをかけさせ、ストップしたところのカードを見せます。右手のカードをその上にのせると、選ばれたカードの上にクリンプカードがくっつきます。

リボンスプレッドします。６角の鉛筆をスプレッド上で転がしますが、ボトムの方から転がすと、クリンプカードで止まります。ボウリングの手つきで転がすのがまっすぐ転がるやり方です。鉛筆の下のカードを抜いて表向きにします。

クリンプカードをキーカードとして使っていますが、鉛筆が止まった隣りのカードを抜き出せば、クリンプカードそのものを現すことができます。

つぎに見つけたのは、「そんなことをどうして思いついたのか」と、自分があきれるほどのアイデアです。またまた記録をそのまま再録いたします。これはノートではなく、〝カードマジックショーアップ講座〟という、サイトで公開したものです。

8．クリンプカードを吹き飛ばす

ブローイングカード

By 加藤英夫、カードマジックショーアップ講座、2004 年 4 月 3 日

左下コーナーを上に曲げたクリンプカードをデックに混ぜておきます。このトリックを行うまえにトップにコントロールします。相手にカードを選ばせ、結果的にクリンプカードの下にくっつくようにして、そしてクリンプカードが中央ぐらいにくるようにして、カードをリボンスプレッドします。

クリンプカードに向かって強く息を吹きかけます。クリンプカードの上でカードがずれます。そこから相手の選んだカードを現します。

もちろん相手のカードをクリンプして、シャフルさせてからやってもかまいません。息を吹きかける方向が重要です。けしてクリンプのすき間に向かって吹いてはいけません。他のカードまで動いてしまいます。クリンプカードの真上から吹くことによって、カードにぶつかって左右に分かれた空気の流れが、クリンプの上のカードを右に動かすのです。

前述の説明には誤りがあります。クリンプカードの下に選ばれたカードを隣接させたのではうまくいきません。息を吹きかけるとクリンプカードの上で分かれるからです。

以上のように、クリンプカードのリビレーションイデアを、思いついたり、思い出したり、検索することによって、出せるだけ出しました。まだ他にもあるかもしれませんが、いまのところ行き止まりです。出発点を見つけたらつぎの作業は、それぞれの出発点から奥に向かって考えていくことです。その思考過程を説明するのは割愛して、見つけた出発点から到達して得られた 3 作品を書いておくことにいたしましょう。

フィーリングカット

= 加藤英夫、2012 年 4 月 27 日 =

これはリストした 3 番目の " マジシャンがクリンプカードでカットする " という出発点から考えたものです。考えたとは言っても、クリンプからカットして現すだけの現象ですから、いかに間違いなくカットするか、いかに効果的に見せるか、ということを考えただけです。

クリンプカードからカットして現すとしたら、2 つの条件を守る必要があると考えました。それは手に持ってカットしないということと、カットすることにカードの方を注視しないということです。

クリンプは選ばれたカードの左下コーナーに、上向きについている必要があります。アップジョグクリンプが適しています。デックがシャフルされたあと、クリンプカードがまん中あたりにいくようにカットして、テーブルの上にドリブルオフしてからそろえます。

「指先のフィーリングでカードを見つけます」と言って、右手をデックの上にかけますが、親指の先が左手前コーナーから右 15mm 程度の位置にかかるようにします。他の指はデックの前端全体にかけてかまいません。右手をかけたら、その状態で 1, 2 秒静止します。

指はカードをつかむというよりも、たんに触れているだけの感じで、何も考えずに右手を上げます。何も考えないというのは、まん中あたりから分けようという意志を持たないということです。そうすると、ほとんどの場合、クリンプカードの上で分かれます。右手をデックにかけてからここまで、視線はカードの方に向けていてはいけません。

持ち上げたらカードの方に視線を向けて、下半分のトップにクリンプカードがあるかどうかを確認します。クリンプカードであったらすぐ左手をクリンプのあるコーナーをつかんで、そのカードを取り上げ、右手のカードを下半分の上に戻します。選ばれたカードを名乗らせてから、左手のカードの表を相手に向けます。そのときクリンプは解消しておきます。

下半分のトップがクリンプカードでない場合、ほとんど上半分のボトムにあります。それはなぜか

というと、右親指がクリンプによって浮いている部分に当たっていなかったからです。

以上の説明を読んでも、面白いトリックではないと思ったのではありませんか。じつは私も面白いとは思っていません。ただデックをカットして1枚の選ばれたカードを現すだけでは、そのやり方がいくら巧妙であろうとも、現象として淡泊過ぎるのです。

しかしながら、クリンプカードでカットするやり方を、上記のように把握できたことは価値があります。4枚のAを同じようにクリンプしておけば、シャフルやカットによって4枚のAを現すのに応用できますし、選ばれたカードをトップにコントロールする手法としても使えます。

トランポリンカード

= 加藤英夫、2012年4月27日 =

これはリストした4番目の出発点、″デックがクリンプカードから分かれる″ということを色々トライアルした結果得られたやり方です。

左下コーナーがクリンプされたカードがデック中央に位置するまで進めます。デックを両手の間に広げて、相手が指さしたカードをアップジョグするときにクリンプすればよいでしょう。

右手でデックを持ち、45度ぐらい前に傾けて、テーブル表面から10～20cm上空にかまえます。図1。

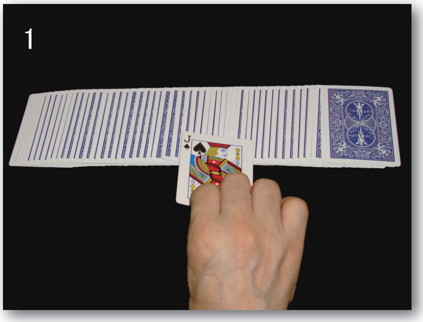
デックを右手から離してテーブルに落とすのですが、少し下にたたきつけるようやります。そうすると、クリンプより上のカードは飛び上がるように分かれます。どのように分かれるかは色々なパターンがあります。3回に1回ぐらいは表向きになってひっくり返ります。最高の結果です。裏向きのまま、下半分の横とか前にジャンプして分かれる場合もあります。悪くても、下半分の上にずれてのっかります。

インザダーク

= 加藤英夫、2012年4月27日 =

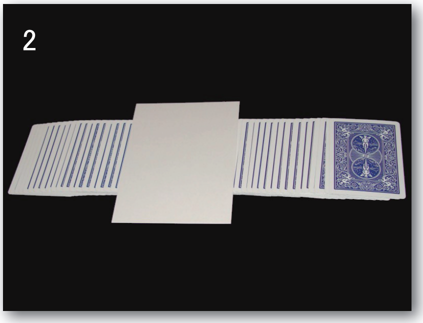
これはリストした5番目の出発点、″クリンプカードの隣りに別のカードを入れる″ということを生かしたトリックです。デックを手に持って、1枚のカードを表向きに中に入れて、その隣りから選ばれたカードを現しても、ほとんどマジックになりません。クリンプを使わなくても、ブレークで実現できてしまいます。

デックを手に持ってやるから面白くないのなら、デックをリボンスプレッドしてやれないか、と私は考えました。するとどうでしょう。すぐにつぎのようなやり方ができることに気づきました。



デックをリボンスプレッドして、1 枚のカードを図 1 のように右から左に向かってスプレッドの上をすべらせていきます。そうするとクリンプカードを越したときに、右手に伝わってわかります。そこですぐ手を止めて、カードを右に戻します。するとそのカードはクリンプカードの下に入り込みます。他のカードと上下がそろえ位置まで押し込みます。

これをそのまままともにやったのでは、面白いマジックにはなりません。ただ選ばれたカードの隣りにカードを入れただけの現象です。しからばと、横向きでやったり、後向きになってやってみたりしました。しかしそのようなやり方をすればするほど、何らかの方法で入れる場所がわかったのではないか、という雰囲気が漂ってしまいます。そこで入れるところを何かで覆ってやればよいと思い当たりました。



デックをリボンスプレッドしたあと、図 2 のように適度な大きさの紙でスプレッドを覆います。クリンプカードが紙の中央に位置するようにです。そして左手で紙の手前を持ち上げて、右手で表向きのジョーカー（もしくは他のカード）を持ち、紙の下で前述のやり方でジョーカーをクリンプカードの下にすべり込ませます。

紙をどけて、表向きのカードとクリンプカードをいっしょに抜き出して、選ばれたカードを名乗らせてから、そのカードを見せます。クリンプを解消します。

カードマジック徹底研究
エイトカードブレーンウェーブ　Part 4

現象を組合せる

今回は、’エイトカードブレーンウェーブ’の現象と他の現象を組合わせることを追求してみたいと思います。

マイケル・アマーは、’エイトカードブレーンウェーブ’と’シカゴオープナー’を連鎖させていましたが、’ブレーンウェーブデック’と組合わせることもできるということは、すぐに思いつきます。問題は、ただ続けて演じればよいというのではなく、連鎖させることをどのような演出でまとめるか、ということにあります。無理につぎのような演出を考えてみました。

レッドフェイス / ブルーフェイス

「よく人前に出ると、顔を赤らめてしまうこともありますし、逆に緊張が強すぎると、顔が青ざめるということがあります。カードでもそういうことが起こることをお見せしましょう」と話をします。そしてエイトカードブレーンウェーブを演じます。選ばれたカードの裏面の裏が赤いか青いかによって、「このカードは青ざめてしまったようです」というようなことを言います。

「つぎはもっと多くのカードでやります」と言って、ケース入りブレーンウェーブデックを取り出し、客に好きなカードを指定させて、それがひっくり返っているのを見せて、「緊張し過ぎてひっくり返ってしまいました」と言います。続けて裏面を見せ、「しかも顔も真っ赤になってしまいました」と言って、裏面を見せます。（もしくは、真っ青になってしまいました）。

上記の例は、ひとつの現象を見せて、つぎは同じような現象を規模を大きくして見せる、というタイプの組合せ方です。累進的という意味で、プログレッシブタイプの組合せ方と呼ぶのが適切でしょう。

プログレッシブタイプの組合せ方は、2 種類の現象を組合せることとはかぎりません。たとえば、’オイル＆ウォーターを 4 枚で演じ、つぎは 8 枚で演じ、最後は 1 組のデックで演ずるというように、3 種類以上の現象を組合せることもできます。

ひとつの現象に対して、それに呼応するような別の現象を起こす、というタイプもあります。これは原則として、2 つの現象の組合せです。このシリーズの Part 1 の’イミグレーション’では、一方のパケットで消失現象を見せ、他方のパケットで消えたカードを再現させています。

このようなタイプを分類するとするなら、レスポンスタイプとでも呼ぶのがよさそうです。

このように無理にでもタイプに呼称をつけることには、けっこう創作テクニックとしてのメリットがあるのです。いままで漠然としていた様々なものが、分類名が明確になることによって、頭の中で整理しやすくなるのです。

’エイトカードブレーンウェーブ’は、レスポンスタイプの現象と組合せるのは、いくらでもできます。なぜなら、パケットaで選ばれたカードが、パケットbの中で特別な状態になっているとか、パケットbで選ばれたのと同一だった、と見せるトリックはいくらでもあるからです。

パケットaで1枚選ばせたあと、パケットbで同じカードをパテオフォースすることができます。ダウンアンダーで最後に選ばれたカードを現すこともできます。裏向きでDUするかUDするか、表向きでDUするかUDするかによって、4枚のカードのどれかを最後に残せるので、8枚のパケットaで選ばれた4枚のうちのどのカードにすべて対応できます。

Part 1の’イミグレーション’は飛行現象でしたが、パケットaとパケットbで表面は同じカードを同じ順で使い、裏面の赤黒を反対にしておけば、選ばれたカードがお互いのパケットで入れ替わったというトランスポジション現象を演じることができます。

そのようなことを考えていると、″Card Magic Libray″第9巻に解説した、ケン・ブルックの作品’フォーフェイセズ’を思い出しました。あの作品では、4枚の中から好きな1枚を言わせてから封筒から4枚のカードを取り出して広げると、他の3枚は裏向きで、指定されたカードだけ表向きになっていて、しかもそのカードを抜いてひっくり返すと、他とは裏面の色が違うという現象です。このトリックを8枚使用に拡張すれば、エイトカードブレーンウェーブとうまく対応します。作品として記録するに値いするものとなりました。

二重の予言

= 加藤英夫、2012年4月21日 =

＊現　象＊

予言の入った封筒を見せます。8枚の異なるカードを表向きに広げてテーブルに並べ、1から8の好きな数を言わせ、言われた枚数目のカードを抜いて、相手の前に置きます。

「この封筒には、同じように8枚のカードが入っていますが、あなたが自由に選んだカードだけ、他のカードと違う状態になっています」と言って、封筒から8枚のカードを出して広げると、他の7枚は裏向きで、選ばれたのと同じカードが表向きになっています。それがハートの7だとします。

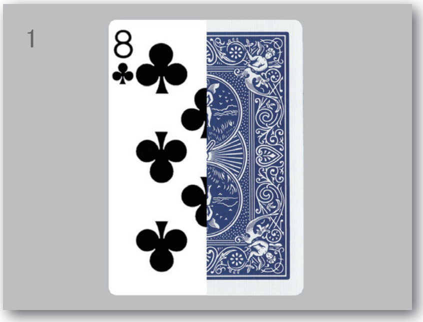
「ハートの7が選ばれることはわかっていたので、このカードだけ色違いにしておきました」と言って、表向きのカードを抜き出して裏返すと、他のカードが青裏だとすると、それだけ赤裏です。

「こちらのカードも見てみましょう」と言って、最初のパケットの 7 枚の裏を見せると、すべて青裏です。「ハートの7が選ばれるとわかっていましたので、やはりこちらも違う色にしておきました」と言って、選ばれたカードを裏返します。赤裏です。

＊準　備＊

パケット 1 は裏面が赤黒交互になっていて、表向きに左から右に広げたときに、左から数えて 1 枚目～ 4 枚目がフォースカードです。それらを a、b、c、dと呼ぶことにしましょう。aとcが赤裏で、bとdが青裏です。表面が適度にばらばらに見えるものを使います。

パケット 2 は、一面が赤で反対面が青のダブルバックカード 8 枚をベースにして作ります。ノーマルデックからaと同じカードを抜き出し、縦に半分に切って、ダブルバックカードの青面に図 1 のように貼ります。



ノーマルデックからcと同じカードを抜き出し、縦に半分に切って、やはり図 1 のようにダブルバックカードの青面に図 1 のように貼ります。ノーマルデックからbとdを抜き出して、同じように半分に切って、ダブルバックカードに貼りますが、赤面の方に貼るようにします。

8 枚をしかるべき向きと順番でセットします。まずダブルバックを青面を上にして 2 枚置きます。その上に a 面を貼ったカードを貼った面を上に向け、しかも貼った側を左にしてのせます。

つぎにb面を貼ったカードを置きますが、b面を貼った側を左にして、しかも貼った面を下に向け、すなわち青面を上にしてのせます。

つぎにc面を貼ったカードを貼った面を上に向け、しかも貼った側を右にして置きます。

つぎにd面を貼ったカードを置きますが、d面を貼った側を右にして、しかも貼った面を下に向け、すなわち青面を上にしてのせます。

最後にあと 2 枚のダブルバックカードを青面を上にして置きます。このようにセットした 8 枚を封筒に入れておます。どの面を上にした出して、どちら側を左に向けて広げると、何のカードが表向きに現れるか、記憶しておきます。

＊方　法＊

現象説明にもとづいて行ってください。

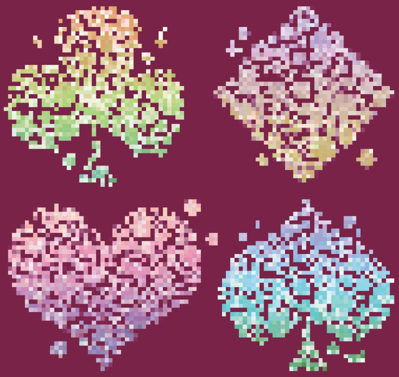
加藤英夫のホームページ

http://www.magicplaza.gn.to/

Card Magic Magazine 第 5 号

発　行　2012 年 9 月 2 日

著　者　加藤英夫

発行者　加藤英夫

hae16220@ams.odn.ne.jp